The Real Fa

取材・文／竹中 聖（本誌） 撮影／中

ハレンチ☆パンチ

写メール→デジカメ→一眼レフ→大きなスタジオにキーライト

「写メール」。彼女たちがメジャーデビューへ至る道の、その最初の道標は本誌であった。本誌のアイドル発掘コーナーで紹介された15人目が小笠原朋美である。スカウト場所はライヴハウスだった。友人が撮ってくれた写メールを編集部に送ることが、今にして思えばキャリアのスタートだった。

「デジカメ」。スカウトされ、何はともあれ訪れた事務所で撮影されたカメラはデジカ

ップバンドユニット。それが小笠原朋美(Vo)、奥菜真子(Mc)、大空さや(G)による「ハレンチ☆パンチ」である。

「お兄ちゃんの影響ですね」。リーダーの小笠原朋美は、唄うことやライヴ好きになった理由をそう説明する。高校時代からバンドを組み、ライヴを続けていた兄の部屋からは「音が漏れてくるんですよ。ハイスタとかスネイルランプとかが（笑）」。兄が出演するライヴには中学生の頃から足繁く通った。いつしか典型的なライヴ好きな女の子になった。

「2000円だけ握りしめて行くんです。毎日

「GIRL's POP」というユニットのコンセプトが決まり、小笠原以外のメンバー選定が本格化していった。「一緒にやれたらいいねぇ」と夢物語を話し合った親友、奥菜がメンバーに選ばれた。アニメが好きで「セーラームーン」がカラオケの十八番だった奥菜は「一時は本当に毎日通ってました」と言うカラオケ通いの相棒でもあった。意気投合し、ユニットへの参加が決まるまではそう時間は要さなかった。奥菜のプロフィールの好きな言葉の欄には「棚からぼた餅」とある。トントン拍子というには生

本誌から生まれたユニットが大きな器であることを祈って

小笠原が初めてライヴのステージに立ったとき、見えたのはステージに立つ自分だったという。往年のF1ドライバーは言った。「レースにおいてベストなのは、テレビゲームの視点のようにマシンを走らせている自分を空から見下ろしている感覚だ」と。小笠原が見たのは、その究極の客観視だったのか、舞い上がっていただけなのか。メジャーデビュー上あとり、住み慣れた京都を離れ、東京

ハレンチ☆パンチ

写真右からリーダー／Vo.小笠原朋美、Mc.奥菜真子、G.大空さや、の3人で構成されるGIRL'S POP バンドユニット。小笠原朋美は本誌のアイドル発掘企画コーナーの出身。兄の影響でライヴハウスに通いつめ、アイドルよりもリアルなバンドサウンドを標榜する。奥菜真子とは高校3年間を通してクラスメイト。しかも出席順も前後であった。いずれも京都出身。大空さやはメンバー最年少。若干15歳ながらギターを担当。リスペクトミュージシャンにレイ・チャールズを挙げる本格派。

http://www.80pan.com

SAYA

MAKO

TOMOMI

姿も初々しい高校生の写真がそこにある。まずは彼女の姿が、多くの読者が知ることになった。

「一眼レフ」。初めてアーティスト写真を撮ったときは、ストロボが2灯、自分に当てられた。「これで緊張解いてくれ」とスタッフがくれた100円で落ち着いた。マネージャーは今も「安いなぁ」と笑う。それはまだ「ハレンチ☆パンチ」というユニット名と、小笠原朋美という一人のメンバーしか確定していなかった頃だった。道中のタクシーの中では「どこに連れて行かれるんやろう…」と思っていた。マネージャーが随伴していても、「タクシーで仕事場に向かう」ことそのものに違和感を感じていた。

「大判カメラにキーライト」。メジャーデビューが決まり、CDジャケット用の写真を撮った。東京の大きなフォトスタジオで、以前よりさらに眩しいライトがたくさんあった。できあがった写真は、プロフェッショナルのデータ処理が施されたものだった…。

1時間180円のカラオケからプロのレコーディングに至るまで

去る8月から放映されているTBSドラマ「新キッズ・ウォー」のエンディングテーマ「白線～スタートライン」を唄うガールズボ

(笑)」。実は臆病な面もあり、自分でバンドを組むことはなかったが、1時間180円だったカラオケボックスに通った。矢井田瞳やアヴリルラヴィーンの曲が好きだった。

スカウトされた後、プロの音楽関係者の前ではとても唄えなかった。大人たちが見ている前では無理もない、カラオケとは訳が違う。それでも既存のミュージシャンやアーティストの歌が課題曲として与えられ、徐々にレッスンの様相を見せていき、レコーディングもするようになった。「初めて『自分の声を録って聴く』という作業は嬉しかったですね」。カラオケで聴いた自分の声とは違う声。その後1年間で、彼女がどれだけの階段を上がったか。本人はまだ知らない。

性格的にもバランスのとれた3人組のユニットが生まれた

レッスン中にレコーディングしたオリジナル曲が、コマーシャルソングに採用された。「お兄ちゃんはレコーディングといっても自費でやってましたから、『オマエいいなぁ』って、ボソッと言われる回数は増えました(笑)。それよりもボクが全然知らない人、友達の、そのまた友達のお母さんが『口ずさんでたよ』って聞いてソクッとしました」。それがメディアというものだと達観するには早かった。

のはむしろ奥菜だったかもしれないが、小笠原に比べて動じない性格で、あまり慌てたり焦った感はない。最後にメンバーとなった大空は、幼少の頃からヴォイスレッスンやダンススクールに通っていたという下積みがあるうえに、環境が多少変化してもニコニコ笑っているB型特有の大らかさというか、おっとりした性格がある。

かくしてキャラクターもバランスの取れた3人のユニットが完成、ビクターの新レーベル「SWEET STAR」からメジャーデビューを果たした。

もはや夢心地とも言えないが冷めるほど達観もしていない

人には「生まれて初めて」という経験が必ずあり、それを繰り返せば「当たり前」になる。それがステップアップというものである。だが本人はそれに気付かない。小笠原が初めての撮影で乗ったタクシーの中で感じたのが、不安や緊張だけであったように。彼女たちの環境をタクシーに例えるなら、飛躍的な早さで車が大きくなっていくそのスピードに、いささか自分のサイズが合っていないような、そんな気持ちだろう。いつか、仕事場に大きな専用車で向かうのが当たり前になったとき、いつの間にか高いところに立っている自分たちにハッと気付くはずだ。

地方のイベントにも、全国オンエアのテレビにも出演した。そしてメジャーデビューを果たした。もはや夢心地でもない、かといって冷めているわけでもない。浮き足立つわけでもないが、地に足がついているわけでもない。デビューまでの期間を「夢みたい」の一言で済ませるほど子供じゃない。だが流暢に説明できるほど大人でもない。初めてレコーディングをしたときの心持ちを聞いてみたが、上手い例えが出るわけでもない。「火星に来たみたい」という感覚はなかったか？ 奥菜が混ぜっ返す。「今、『じゃぁそれで』って顔を朋美はしました(笑)。この子にそういうヒント与えちゃダメです(笑)」。

間の加速度に、はっきり見えていた周りの景色が、流れ去っていくだけになる。それでもレコーディング、ライヴ、イベント、スチールやPV撮影、テレビやラジオ出演、取材…。今は何をやっても楽しいという言葉しか出てこない。彼女たちのゴールラインにひかれる線は何色なのだろう。それももちろん解らない。デビューシングルのタイトルどおり、彼女たちはまだ、目の前にひかれた太くて立派なスタートラインの白線を越えたばかりなのだから。

取材当日、京都で行われたイベントには、デビュー前にしてすでに横浜から駆け付けたファンがいたという。それが事務所やレーベル、周りのスタッフたち…、「環境というタクシー」に乗って、彼女たちがいっぱしのアーティストになる、その大器の片鱗であることを願うだけである。

「タクシーの運転手さんには、いっぱい寄り道して欲しいな」。最後に小笠原朋美がポツリと言った。

information

去る8月24日にメジャーデビューシングルにしてTBS系テレビの昼の人気ドラマシリーズ「新キッズ・ウォー」のエンディングタイトル「白線～スタートライン」をリリース。カップリングの「ジュエル」は、Gem CEREYの全国テレビCFソングと、TBS系テレビ「ハナタカ天狗」のオープニングテーマのダブルタイアップ。来る11月23日にはセカンドシングル「メガホン」をリリース予定。PS2ゲームソフト「リバースムーン」の主題歌に抜擢されている。

ハレンチ☆パンチ
「白線～スタートライン」
Sweetstar／VICL-35896
定価1200円（税込価格1143円）